「風　姿　花　傳」(4/4)

世阿弥　著
野上豊一郎・西尾　実　校訂

世阿弥（1363？～1443？）
世阿弥 - Wikipedia

岩波文庫　３３－００１－１
ワイド版岩波文庫31
岩波書店　1991年6月第1刷発行
　　2009年8月14版発行

目次

凡例
（序）
第一　年来稽古條々（ねんらいけいこじょうじょう）
第二　物学條々（ものまねじょうじょう）
第三　問答條々（もんどうじょうじょう）
第四　神儀云（しんぎうん）
第五　奥儀讃歎云（おうぎさんたんうん）
第六　花修云（かしょううん）
第七　別紙口伝（べっしくでん）
校訂者の言葉

花伝第七　別紙口伝

一、この口伝に、**花を**知る事、先づ、假令、**花の**咲くを見て、萬に**花**と喩（たとえ）へ始めし理を辨（わきま）ふべし。

そもそも、**花**といふに、萬木千草において、四季折節に咲く物なれば、その時に得て珍しき故に、翫（もてあそ）ぶなり。申楽も、人の心に珍しきと知る所、即ち面白き心なり。**花**と、面白きと、珍しきと、これ三つは同じ心なり。

いづれの**花**か散らで残るべき。散る故によりて、咲く此（ころ）あれば、珍しきなり。ただし、様あり。珍しきといへばとて、世になき風体をしだすにてはあるべからず。花伝に出だす所の條々を悉（ことごと）く稽古し終わりて、さて、申楽をせん時に、その物数を用々に従ひて、取り出だすべし。**花と**申すも、萬の草木において、いづれか、四季折節の、**花の**外に、**珍しき花の**あるべき。その如くに、習い覚えつる品々を極めぬれば、時・折節の当世を心得て、時の人の好みの品によりて、その風体を取り出だす、これ、**時の花**の咲くを見んが如し。**花と**申すも、去年（こぞ）咲きし種なり。能も、もと見し風体なれども、物数を極めぬれば、その数を盡すほど久しし。久しくて見れば、また珍しなり。

その上、人の好みも色々にして、音曲・振舞・物まね、所々に変わりて、とりどりなれば、いづれの風体をも、残しては叶ふまじきなり。しかれば、物数を極め盡したらん為手は、初春の梅より秋の菊の**花**の咲き果つるまで、**一年中の花の**種を持ちたらんが如し。いづれの**花**なりとも、人の望み、時によりて、取り出だすべし。物数を極めずば、時によりて、**花を**失ふことあるべし。喩（たと）へば、**春の花**の此（ころ）過ぎて、**夏草の花**を賞翫（しょうがん）せんずる時分に、**春の花**の風体ばかりを得たらん為手が、**夏草の花**はなくて、過ぎし**春の花**をまた持ちて出でたらんは、**時の花**に合ふべしや。これにて知るべし。ただ、**花**は、見る人の心に珍しきが**花**なり。

しかれば、花伝の**花の段**に、「物数を極めて、工夫を盡して後、**花**の失せぬ所をば知るべし。」とあるは、この口伝なり。されば、**花**とて別にはなきものなり。物数を盡して、工夫を得て、珍しき感を心得るが**花**なり。「**花は心**、種は態（わざ）」と書けるも、これなり。

物まねの鬼の段に、「鬼ばかりをよくせん者は、鬼の面白き所をも知るまじき」と
申したるも、物数を盡して、鬼を珍しく出だしたらんは、珍しき所花なるべきほどに、
面白かるべし。餘の風体はなくて、鬼ばかり（をする）上手とは思わば、よくしたりとは
見ゆるとも、珍しき心あるまじければ、見所に花はあるべからず。「**巌に花の咲かんが如し**」
と申したるも、鬼をば強く、恐ろしく、肝を消すやうにするならでは、およその風体なし。
これ、巌なり。花といふは、餘の風体を残さずして、幽玄至極の上手と人の思ひ
慣れたる所に、思ひの外に鬼をすれば、珍しく見ゆるる所、これ、**花なり。**
しかれば、鬼ばかりをせんずる為手は、巌ばかりにて、**花は**あるべからず。

花伝第七・別紙口伝現代語訳

**一つ、この口伝の最初に、花の咲く様子をみて、そこからすべてのことが花に例えられる
という原則・原理を理解しなければならないとしている。この話の始まりは、花というものは
すべての草や木に、季節に応じて咲くもので、それが人々にとって珍しく、面白く、楽しい
ものだからである。申楽という藝能も見る人にとって珍しく、面白く、楽しいものである。
この三つは同じものである。どの花もいつかは散ってしまうから、花が咲いている時が
貴重であり、珍しいからである。その珍しさにも様々な形がある。とはいっても、世の中に
ないような形式・スタイルのものはいけない。「花伝」に書かれている事をすべて習得し、
申楽を演じる時に書かれていた事例を場面に合わせて応用すべきである。自然の中の
花といえども、四季に合わせて咲く以外にも珍しく面白いものがある。そのように、
習い覚えた演技をさらにレベルをあげていくと、その時代、その季節、流行などを考え、
人々の好みや期待に合わせて演技をすることが、まさに季節の花を見るようなものだ。
花というのは、前の年に咲いた花がつけた種があってもものだ。能にも、見慣れた演技で
あっても、数多くを演じていても、間をおいて、久しぶりに見るとそれも楽しいものだ。
そのうえ、人々の好みも多様で、音楽・振付・演技なども色々あって、演じる場所に
よっても変わる。そんな多様なスタイルや演じ方をすべて残すことは難しい。
だから、どんな役も演じこなす名優というのは春の梅から秋の菊花まで一年中の花の
種を持っているようなものだ。どんな花でも望みに応じて取り出すようなものだ。
場数を多く踏まなければ、望まれる花を取り出すことが出来ないこともある。
たとえば、春の花の季節が過ぎて夏の花の季節になっても、春の花しかないと
いうのと同じだ。花というのは見る人にとって新鮮で面白いのが花である。
だから、「花伝」の花の章では、「演目を数多くこなし、創意工夫を重ねて、花が
無くなるというのはどんなことか知らなければならない。」とあるのは、この事だ。
花といものが特別にあるのではない。能の場数を多く踏み、創意工夫を重ねてこそ
花の珍しさ、面白さ、楽しさを生み出す感覚が花である。「花は心、種は技術」と
書かれているのはこの事ことだ。
物まねの鬼について書かれている部分には「鬼の役しか演じられない役者は
鬼の面白さは分からない」と書かれている。演技を試行錯誤して鬼の演技に新しさ、
珍しさを出せば、それは花となり、面白い。多様な演技の幅を持たず、鬼の役だけを
うまく演じる役者だと思われても、新しさ、珍しさを出そうとする気持ちがなければ、
その演技には花はない。「岩に花が咲くように」というのは、鬼の役をただ、強く、
恐ろしく、肝をつぶすくらいに演じるだけでは確立したスタイル・演技とはならない。
この事ははっきりしている。花というのは、その役者が持っているスタイル・形の
すべてを出し切り、幽玄の演技が得意な役者が予想外の鬼の演技をすれば、
これは、見る人にとっては珍しく、面白く花となる。だから、鬼だけを演じている
役者は岩そのものであって、そこには花がない。**

一、細かなる口伝に云はく、音曲・舞・働き・振り・風情、これまた、同じ心なり。
これはいつもの風情・音曲なれば、さやうにぞあらんずらんと人の思ひ慣れたる所を、
さのみに住せずして、心根に、同じ振りながら、元よりは軽々と風体を嗜み、いつもの
音曲なれども、なほ、故実に廻（めぐ）らして、曲を彩り、声色（こわいろ）を嗜みて、
我が心にも、今ほどに執す事なしと、大事にして、この態（わざ）をすれば、見聞き
する人、常よりもなほ面白きなど、批判に合ふことあり。これは、見聞きく人のため、
珍しき心にあらずや。

しかれば、同じ音曲・風情をするとも、上手のなしたらんは、別に面白かるべし。
下手は、もとより、習い覚えつる節博士の分なれば、珍しき思ひなし。
上手と申すは、同じ節かかりなれども、曲を心得たり。曲と云うは、節の上の花なり。
同じ上手、同じ花の中にても、無上の公案を極めたらんは、なほかつ、花と知るべし。
およそ、音曲にも、節は定まれる形木、曲は上手のものなり。舞にも、手は習える形木、
品かかりは上手のものなり。
舞にも、ては習える形木、品かかりは上手のものなり。

現代語訳

**一つ、詳しい口伝には、音楽・舞・振付・心情表現、これらもまたみな同じものだと云われている。
心理描写、音楽はいつもの演目のなかにあるものだが、ありふれたものと思っている人にとって、
役者の気持ちは同じでも、もともとから軽快なスタイルを好み、音楽も同じようでであっても、
少し変化を付け、声も付けて、従来のやり方にとらわれないで演技をすれば、観客はいつも
よりも面白いと評価する。これは観客にとっては珍しいことではない。だから、同じ演目で同じように
演技しても、名人が演技すれば、これも面白い。下手な役者は覚えた通り、台本通りに演じるので
面白くはない。上手な役者というのは同じ演目、同じ音楽であっても、音楽を知り、変化を付ける。
同じ役者でも名人はさらに創意工夫を加えて、見所、聞き所を作る。それは役者のものだ。
舞にも、振付にも型があっても、それに変化を付ける。それは役者のものだ。**

一、物まねに、似せぬ位あるべし。物まねを極めて、その物にまことに成り入りぬれば、
似せんと思ふ心なし。さるほどに、面白き所ばかりを嗜めば、などか**花**なるべき。例えば、
老人の物まねならば、得たらん上手の心には、ただ、素人の老人が、風流・延年などに
身を飾りて、舞ひかなでんが如し。もとより、己が身が年寄りならば、年寄に似せんと
思ふ心あるべからず。ただ、その時の物まねの人体ばかりをこそ嗜むべけれ。
また、老人の、**花**はありて年寄と見ゆるる口伝と云うは、まづ、善悪、老じたる
風情をば、心にかけまじきなり。そもそも、舞・働きと申すは、萬に、楽の拍子に
合わせて、足を踏み、手を指し引き、振り・風情を拍子に当ててするものなり。
年寄りぬれば、その拍子の当て所、太鼓・歌・鼓の頭よりは、ちちと遅く踏み、
手をも指し引き、およその振り・風情をも、拍子に少し遅るるるようにあるものなり。
この故実、何よりも、年寄の形木なり。このあてがいばかりを心中に持ちて、
その外をば、ただ、世の常に、いかにもいかにも**花**やかにすべし。まづ、假令も、
年寄の心には、何事も若くしたがるものなり。さりながら、力なく、五体も重く、
の物まねなり。態（わざ）をば、年寄りの望みの如く、若き風情をすべし。
これ、年寄りの、若き事を羨（うらや）める心・風情を学ぶにてはなしや。
年寄りは、いかに若振舞をすれどども、この拍子に遅るる事は、力なく、叶わぬ
理なり。年寄りの若振舞、珍しき理なり。**老木に花の咲かんが如し**。

現代語訳

**演技、役作りには上手も下手もある。演技・役作りをつきつめれば、その役になり切る
ことであり、なり切れば、役に似せようという気持ちはいらない。だから、面白くなる
場面に集中して、演技すればそれは花・見所となる。たとえば、老人を演じる時、
上手な役者はただただ、素人の老人が気ままに、年をとるに任せて舞うように演じる。
役者自身が老人であれば、あえて老人を演じようとは考えたりはしない。その時の
役柄だけに専念するように心がける。口伝には、花のある老人は善悪をわきまえた
心情だけを表現することに気を使っている。舞・所作というものは、すべて、音楽の
リズムに合わせて足を踏み鳴らし、手を使い、しぐさ、心情をリズムに乗せるものである。
どんな役者も年をとればリズムの要素となる太鼓や歌の始まりよりも少し遅れてしまう。
この現実が何よりも基本となる。この現実を心に受け入れて、外見をいつものように
軽やかに演じるように心掛ける。年寄りというのは何事も若く見せようとするものだ。
しかし、体力も落ち、自分の体を重くなっての演技となる。演技としては若く見せようと
思いつつ、気持ちだけは若く持っていなければならない。これには高齢者が若さをうらやましく
思う心情についてよく知る事しかない。高齢者はどんなに若く見せようと振る舞っても、
素早く動くことは出来ない。これが現実である。高齢者が若々しく振る舞うのは全く
珍しい、数少ないことなので、それは花といえる。まるで、老木に花が咲くようなものだ。**

一、能に十體を心得べきこと。十體を得たらん為手は、同じ事を、一廻り一廻り
づつするとも、その一通りの間久しかるべければ、珍しかるべし。十體を得たらん
人は、その内の故実・工夫にては、百色（ももいろ）にも亙るべし。先づ、五年・
三年の中に一遍づつも、珍しく替ふるやうならんずるあてがひを持つべし。
これは、大きなる安立なり。または、一年の中、四季折節をも心に掛くべし。
また、日を重ねたる申楽、一日の中は申すに及ばず、風体の品々を彩るべし。
かやうに大がうより初めて、ちちとある事までも自然自然に心に掛くれば、
一期、花は失せまじきなり。
また云はく、十體を知らんよりは、年々去来の**花**を忘るべからず。年々去来の
花とは、例へば、十體をとは物まねの品々なり。年々去来とは、幼かりし時の
装ひ、**初心の時分**の態（わざ）、手盛りの振舞、年寄りての風体、この時分時分の
おのれと身のありし風体を、皆、当藝に一度持つ事なり。ある時は児（ちご）・
若族（にゃくぞく）の能かと見えて、同じ主とも見えぬやうにすべし。これ、即ち、
幼少の時より老後までの藝を一度に持つ理なり。さるほどに、年々去り来る花と云へり。
ただし、この位に至れる為手、上代・末代にも、見も聞きも及ばず、亡父の若盛り
の能こそ、蔦（ろう）たけたる風体、殊に得たりけるなど聞き及びしか、四十有余の
時分よりは、見慣れし事なれば、疑ひなし。自然居士（じねんこじ）の物まね、
高座の上にての振舞を、時の人、十六七の人体に見えしなど、沙汰ありなし。
これは、正しく人も申し、身にも見たりし事なれば、この位に相応したりし達者かと
覚えしなり。かやうに、若き時分には、行末の年々去来の風体を得、年寄りては、
過ぎしかたの風体を身に残す為手、二人とも見も聞きも及ばざりしなり。
されば、**初心より**以来（このかた）の藝能の品々を忘れずして、その時々、用々に
従ひて取り出だすべし。若くては年寄りの風体、年寄りては盛りの風体をし捨てし
捨て忘るる事、ひたすら、花の種を失ふべし。その時々にありし花のままにて、
種なければ、手折れる枝の花の如し。種あらば、年々時々の此（ころ）に、
などか逢はざらん。ただ、**返す返す初心を忘るるべからず**。されば、常の批判にも
若き為手をば、「早く上がりたる」、「劫入りたる」など褒（ほ）め、年寄りたるをば
「若やぎたる」など、批判するなり。これ、珍しき理ならずや。十体の内を彩らば、
百色にもなるべし。その上に、年々去来の品々を、一身当藝に持ちたらんは、
いかほどの花ぞや。

現代語訳

**能には10種類の演目がある事を知らなければならない。（2回目の紹介で、末尾に
現在演じられている演目をご紹介しました。現在演じられているのは10種類のうち
4種類です。脇能物（初番目物）・二番目物～5番目物で、公演の当日の演目順が
あって、当時は1日に10の演目がその順に従って演じられたようです。）
10種類の演目を一通り演じる役者にとって、次に演じるまでにはしばらくの期間が
あるから、次の別の公演でも、飽きられずに面白く見てもらえる。10種類の
演目を演じる役者にとっては、その間に、様々な工夫をかさね、その工夫は
100にもおよぶバリエーションとなる。少なくとも、5年や3年にはその10種類の
演目の演じ方に変化がでることが当然であると思わなければいけない。
これができれば、大きな安心となる。演技に変化を付けるのは1年間の中で、
季節が変わるのに応じての事である。公演回数の多い申楽では一日の中でも
当然の事として衣装にも変化を付けるべきだ。このように、全体を把握して
さらに細々としたことにまで自然、自然に心掛ければ、一生花を失う事はない。
また、10種類の公演演目順をこなすようになれば、それまでの花を忘れていけない。
それまでに身に付けた花は、10種類の演目の演技であり、これまでにというのは
幼いころの衣装だったり、その時の意識した演技の要点だったり、手が柔軟に
こなせた所作だったり、年を取ってからの雰囲気など、その時々の自分自身の
体に起きた変化のこと、それらをすべてをこの能の演技の背景、下地とすることだ。
これは、幼い子供から老人までの演技を一度に持つということにもなる。
だからこそ、それまで過ごしてきたことが花となるのだ。そのような役者がいると**

昔も今も聞いたことも見たこともがない。今はなき父観阿弥の若いころの能は、
年季を積んだ風格のある演技だったと聞いている。四十数年間も父の姿を見て
来ているので、それは疑いのない事だ。自然居士（じねんこじ・修行僧）を演じて
いる父の姿はまさに16・7の少年の姿に見えたと、評判になった。この事は
他人も云っているし、身内の自分も見ていることなので、それくらいの名人だと
思った。若いころに未来の老いた姿を演じ、年を取ってからはかっての若いころの
雰囲気をだす演技をする役者は父以外にもう一人いるなんて見たこともない。
このように、若いころに決意して藝能の道に入り、色々学んだ事を忘れずに、
TPOに応じて、取り出すこと事だ。若いときに演じた年寄りの役、年を取ってからの
若者の役、これらを全部忘れてしまっては花の種を失うようなものだ。
その時々の花だけで、種として持っていなかったなら、折り取った枝の花の
ようなものだ。種として持っていれば、その後の同じ場面で役にも立てれる。
なんどでもいうが、初心（時々の決意）を忘れてはいけない。世間はいつも、
若い役者を「早く上手になった」、「年季が入っている」などと褒め、年取れば、
「若々しい」と評判にする。それは別に珍しいことでもない。すべての演目に
色々工夫を重ねれば、演技のバリエーションが100にもなる。そのうえで、
これまで演じてきた経験すべてを現在の演技に生かせばどれだけ、面白い
見ごたえのあるものなるだろう。

一、能に萬づ用心を持つべき事。假令、怒れる風体にせん時は、柔らかなる心を
忘るべからず。これ、いかに怒るとも、荒かるまじき手立てなり。怒れるに柔らかなる
心を持つ事、珍しき理なり。また、幽玄の物まねに、強き理を忘るべからず。
これ、一切、舞・働き・物まね、あらゆる事に住せぬ理なり。また、身を使う中にも、
心根あるべし。身を強く動かす時は、足踏みを盗むべし。足を強く踏む時は、
身をば静かに持つべし。これ、筆に見え難し。相対しての口伝なり。これは、
花習の題目に詳しく見えたり。
現代語訳
一つ、能の世界で用心、注意しなければならないことがある。怒っている
演技をする時は、柔らかな、優しい心を忘れないこと。どんなに怒っている
演技をするときも荒々しいのは良くない方法である。怒っているのに
優しさはあるのは変な事である。また一方、幽玄の物静かな演技をするときには
荒々しさを意識すること。この事は、舞、所作にはない概念である。
体を使って演じる時にも、心情としては持つべき物である。体を強く
動かす所作の時の足踏みは抑え気味にすべきである。足を強く踏む
時は体を静かに動かすべきである。この事は言葉では説明しにくいので
口伝、OJTで伝えている。花修の章で詳しく説明した。

一、秘する花を知りたる事。秘すれば花なり。秘せずば花なるべからず、となり。
この分け目を知る事、肝要の花なり。そもそも、一切の事、諸道藝において、
この家々に秘事と申すは、秘するによりて大用あるが故なり。しかれば、秘事
という事を顕（あら）はせば、させる事にてもなきものなり。これをさせる事にてもなし
と云う人は、未だ、秘事ということの大用を知らぬが故なり。先づ、この花の口伝
におきても、ただ、珍しきが花ぞと皆人知るならば、さては珍しき事あるべしと思ひ
設けたらん見物衆の前にては、たとひ珍しき事をするとも、見手の心に、珍しき
感はあるべからず。見る人のため、花ぞとも知らでこそ、為手の花にはなるべけれ。
されば、見る人は、ただ思ひの外に面白き上手とばかり見て、これは花ぞとも知らぬが、
為手の花なり。さるほどに、人の心に思ひも寄らぬ感を催す手立、これ花なり。
例えば、弓矢の道の手立にも、名将の案・計らひにて、思ひの外なる手立にて、
強敵にも勝つ事あり。これ、負けくる方のためには、珍しき理に化かされて、
敗らるるにはあらずや。これ、一切の事、諸道藝において、勝負に勝つ理なり。
かやうの手立も、事落居して、かかる計り事よと知りぬれば、その後はたやす
けれども、未だ知らざりつるゆ故に、負くるなり。さるほどに、秘事とて、
一つをば我が家に遺すなり。ここをもて知るべし。たとひ、顕（あら）はさずとも、
かかる秘事を知れる人ぞとも、人には知られまじきなり。人に心を知られぬれば、
敵人油断せずして用心をもてば、かへって、敵に心を附くる相なり。敵方用心を

せぬ時は、此方の勝つ事、なほたやすかるべし。人を油断させて勝つ事を得るは、
珍しき理の大用なるにてはあらず。さるほどに、我が家の秘事とて、人に知らせぬを
もて、生涯の主になる花とす。秘すれば花、秘せねば花なるべからず。

現代語訳

**一つ、秘密にしてきた花についての説明、記述は秘密にするからこそ花である。
秘密にしなければ、それは花にはならない。この分別、違いを知る事は重要な花である。
すべての藝能、職業分野において、その家業に企業秘密があるのは、その効用が
大きいからである。企業秘密を公開すれば、秘密では無くなる。秘密にする必要が
ないという人は、全然、企業秘密の効用を知らないからである。花の口伝の章でも、
多くの人が珍しいと思うから珍しいのであって、珍しいと思っていない人のに珍しい
物を見せても、珍しいとは思ってくれない。見る人にとって、珍しいからこそ花になる。
見る人にとって、花とは知らなくても、面白く、うまい演技だと思ってくれれば、
それは役者の花になる。見る人にとって予想外のことを見せるのが花である。
たとえば、弓矢の勝負事にも作戦方法がある。名将の意外なアイデアによって
勝負に勝つことがある。負けた方から見れば、変な作戦にだまされて負けた
というのではない。すべての分野において、勝負に勝つということの真理である。
この場合、後からそれが作戦、計略だと知ってしまえば、その後からは
対応策を立てるのはたやすい事である。それを知らないから負けるのである。
だからこそ、企業秘密の一つは持つべき物なのだ。この事を知って置かねば
ならない。たとえ、その秘密を公開しなくても、秘密を持っていることを人に
知られてはならない。秘密にしていることを人に知られると、相手は油断する
ことなく、対応を立てて、相手に知恵をつけてしまう。相手が気をゆるし、
用心していなければ、こちらは勝ちやすい。相手を油断させて、勝つには
特別に珍奇な作戦がいるわけではない。自分の秘密を持っていることを
知られず、一生持ち続ける事が花になるのだ。秘密にするからこそ花であって、
秘密にしなければ花にはならない。**

一、因果の花を知る事、極めなるべし。一切、みな因果なり。初心よりの藝能の
数々は、因なり。能を極め、名を得る事は、果なり。しかれば、稽古するところの
因おろそかになれば、果を果たすことも難し。これをよくよく知るべし。また、時分
にも恐るべし。去年盛りあらば、今年は花なかるべき事を知るべし。時の間にも、
男時・女時とてあるべし。いかにすれども、能にも、よき時あれば、必ず、また
わろき事あり。これ、力なき因果なり。これを心得て、さのみに大事になからん
時の申楽には、立合勝負に、それほどに我意執を起こさず、骨をも折らで、
勝負に負くるとも心に懸（かけ）ず、手を貯（たば）いて、少なく少なくと能をすれば、
見物衆も、これはいかやうなるぞと思い醒めたる所に、大事の申楽の日、手立を
変えて、得手の能をして、精励を出だせば、これまた、見る人の思ひの外なる
心出で来れば、肝要の立合、大事の勝負に、定めて勝つ事あり。これ、珍しき
大用なり。このほどわるかりつる因果に、またよきなり。
およそ、三日に三庭の申楽あらん時は、指寄の一日などは、手を貯（たば）いて、
あひしらひて、三日の中に、殊に折角の日とおぼしからん時、よき能の得手に
向きたらんを、眼睛（がんせい）を出だしてすべし。一日の中にても、立合などに、
自然、女時に取り逢ひたらば、初めをば手を貯（たば）いて、敵の男時、女時に
下る時分、よき能を揉（も）み寄せてすべし。その時分、また、此方の男時に
復（かえ）る時分なり。ここにて能よく出で来ぬれば、その日の第一とすべし。
この男時・女時とは、一切の勝負に、定めて、一方色めきて、よき時分になる
事あり。これを男時と心得べし。勝負の物数久しければ、両方へ移り変わり
移り変わりすべし。ある時に云はく、「勝負神とて、勝つ神、負くる神、勝負の
座敷を定めて、守らせ給ふべし。弓矢の道に、宗（むね）と秘することなり」。
敵方の申楽よく出で来たらば、勝神彼方にましますと心得て、先づ、恐れを
なすべし。これ、時の間の因果の二神にてましますれば、両方へ移り変りて、
また、我が方の時分になると思はん時、頼みたる能をすべし。これ、即ち
座敷の中の因果なり。返す返す、おろそかに思ふべからず。信あらば徳あるべし。

現代語訳
ひとつ、世の中は因果関係・原因と結果の関係でつながっているという事十分に知らなければならない。能の道に進もうと決心してから、様々な経験すべてが物事の原因を作っている。能の道で上達して名を揚げる事ができるのはその結果である。だから、稽古を積むという原因を作らなければ、その結果としての成果を得ることは難しい。この事を十分に知らなければならない。また、時の経過、時間の要素が原因になるということにも注意しなければならない。過去に花・見せ場を持っていたからといって、今も持ち続けられるとは限らない。時間には男時間・女時間というものがある。どんなに努力し、工夫をしても結果として良いことも、悪いこともある。その原因は役者としての力量がないことにある。そんなものだと理解して、大事な公演でも、申楽を演じるとき、競争相手がいれば、勝つという執着を持たずに、苦労もせず、勝負に負けても気にもせず、手を抜いて、楽に楽に能を演じるようであれば、観客は何があったのかと冷たい眼で見る。ここぞという大事な公演では、演出にも工夫をし、得意な演目を選び、丁寧に演技をすれば、観客にとっては想像以上に感動すれば、大事な公演、勝負であっても、必ず勝ことができる。そのようになれば、因果関係が明確ないい例である。
三日間に3ケ所で公演をしなければならない時、最初の一日は余力を残し、その中で特に大事な日には、得意な演目を選んで、丁寧に演じるべきである。一日の中でも、競争相手がいるような場合、静かな流れの時間帯の時ははじめは力を入れず、相手が激しい動きから、静な動きに移っていく頃、自分の方は得意な演目を選んで演じるべきである。その時が時分にとっては男時・ここぞという時であるので、うまく演じることができれば上出来である。このように、男時・女時という時間の流れは一方の方が優勢になることである。このような優勢な流れを男時ということをしるべきである。競争することが多くなれば、流れがどちらかへ向いていくことがある。ある時にこう聞いた。
「勝負の神には勝つ神と、負ける神がいる。その時、その場所に付いている。それは弓道の世界ではそのことを大事にして秘密にしている。」
競争相手がうまく演じている時は勝神は相手側にいるとして警戒しなければならない。これは時間の流れに因果関係がある神がいて、相手側にも、当方側にも移り変わるものである。流れが当方に優勢になった時には自信のある演目を演じるべきである。これが会場にまつわる因果である。決して、この事を疎かにはしていけない。そのように信じていれば、良い結果がでる。

一、そもそも、因果とて、よし・あしき時のあるも、公案を盡して見るに、ただ、珍しきと珍しからぬの二つなり。同じ上手にて、同じ能を、昨日・今日見れども、面白やと見えつる事の、今日また面白くもなき時あるは、昨日面白かりつる心慣（こころなら）ひ、今日は珍しからぬによりて、わろしと見るなり。その後、また、よき時のあるは、先にわるかるつるものをと思ふ心、また、珍しきに復（かえ）りて面白くなるなり。されば、この道を極め終わりて見れば、**花とて**別にはなきものなり。奥儀を極めて、萬づに珍しき理を我と知るならでは、**花はあるべからず。経に云はく、「善悪不二、邪正一如」とあり。本来より、**よき・あしきとは、何をもて定むべきや。ただ、時によりて、用足る物をばよき物とし、用足らぬをあしき物とす。この風体の品々も、当世の数人、所々に亙（わた）りて、その時の遍ねき好みによりて取り出だす風体、これ、用足るための花なるべし。此所に、この風体を翫（もてあそ）めば、彼所に、また餘の風体を賞翫す。これ、人々心々の花なり。いづれを誠にせんや。ただ、時に用ゆるをもて、花と知るべし。
現代語訳
一つ、一般的にいって、因果には良いことも、悪い事もあるので、そのことをよくよく考えてみれば、演技には珍しさ・新規性とつまらない・陳腐の二つがあるだけだ。同じ役者が同じ演目を演じても、今日は良かっても、

次に日はつまらなくなってしまうことがある。それは見る人にとって、
前日は面白いと感じた事が、翌日には当たり前になって面白くないと感じる。
その後の公演では、面白いと見て貰えるのは、あまり期待していなかったのに
それが、新鮮で、面白いと再び思って貰えるからである。この藝能の
世界を知り尽くして見ると、花というものが特別にあるのではないといえる。
秘伝の奥儀を体得して、すべての演目、演技に面白いさがあることを
知ってしまえば、花というものは無くなってしまう。仏典には「善悪不二、
邪正一如・善悪は別物ではない、邪正もまた別物ではなく同じもの。」とある。
いい、わるいは何を規準にしているのか。TPO（時・所・状況）によって
役に立つものがいいとされ、役に立たないものはわるいとされる。
演技のバリエーションもその時代の数多くの役者が、多くの場所で演じ、
その時、その土地の好みに合わせて演じることで、観客のニーズに
あっているからこそ花といえるのだ。だから、演技のバリエーションを
楽しむようにすれば、それはそれで、楽しみとして受け入れられる。
それは、役者の花というよりも、観客のほうに花があるといえる。
どちらが正解かはTPOによって決まるものが花だと覚るべきである。

一、この別紙口伝、当藝において、家の大事、一代一人の相伝なり。
たとひ、一子たりと云ふとも、無器量の者には伝ふべからず。
「家、家にあらず。次ぐをもて家となす。人、人にあらず。知るをもて
人とす」と云へり。これ、万徳了達の妙花を極むる所なるべし。

一、この別紙口伝條々、先年、弟四郎に相伝するといえども、元次、
藝能感人たるによつて、これを又伝ふる所なり。秘伝秘伝
　応永二十五年六月一日　　世阿在判

此本十郎大夫方のを書写也。又此家の本も有。同之。
以上十ケ條、少もちがはず。十郎かたの書は家康に御所持也。
二札の外あるべからず。秘伝々々。於遠州写之。
天正六年十月吉日　　宗節（花押）

後花伝抄、信忠様、家康へ御懇望なされ、御所持に候。乍去、大事
の書物は御残し候て不参候。
現代語訳
一つ、この口伝の内容は能の世界にとっても、また我が家にとっても
重要な事である。その世代において一人だけに伝承するものである。
たとえ、実子であっても、能力のない者には伝承してはならぬ。
「家が後継するのではない、後継する人が家を次ぐのである。
後継するのは人でもなく家でなく知恵のある者である。」と云っている。
これは人徳を積み重ねた結果の花である。

一つ、この口伝を、先年、実弟の四郎に伝えた。しかし、元次はこの
芸の世界を極めた役者として、また、彼にも伝えた。秘伝にすべしと。
応永25年（1418年）6月1日　世阿の印

この本は十郎に伝わった物を書き写した。我が家に伝わるものと同じ。
内容の十ケ條は少しも違っていない。十郎に伝わった本は家康が所蔵。
この2冊以外にあってはならない。秘伝にすべし。　遠州・静岡で写した。
天正6年10月吉日　宗節（サイン）

その後、「風姿花伝」は織田信忠（1557～1582）が、
家康（1543～1616）に懇願して譲り受けた。
残念ながらこの本は残っていない。

校訂者の言葉（要約）

「風姿花伝」が秘伝から公開されるまでの経緯

・明治42年（1909）に吉田東伍博士が「能楽古典　世阿弥十六部集」を学会に発表
　それまでは、観世家、金春家に秘蔵され、ほとんど知られていなかった。

・昭和2年（1927）に岩波文庫に収録された。
　その後、研究が進み、新資料も多く発見された。

「風姿花伝」のうち第三篇までが世阿弥に本名秦元清の名前で書かれている。世阿弥39歳。（1400年）
第四第五は世阿弥39歳の時、「花鏡」は61歳の時、「却来花」は70歳の時（1433年）
第一期・全盛の時代・45歳まで・足利義満の時代
第二期・不遇の時代・46歳から65歳まで・その間息子元雅の急死・自身の佐渡流刑・足利義持の時代。

現存する能楽伝書の例（このほかにも多数あります。）

能楽伝書（1）
世阿弥伝書
能楽研究所蔵
世阿弥伝書。

能楽伝書（2）
禅竹伝書
能楽研究所蔵
金春禅竹の能楽伝書。

能楽伝書（2）
能楽伝書
能楽研究所蔵
室町後期の能楽伝書。

能楽伝書（3）
能楽伝書
能楽研究所蔵
金春大夫元安（禅鳳）の伝書。

日本で「風姿花伝」が書かれた時代はヨーロッパではルネサンスの時代でした。
ヨーロッパルネサンスは人間性の復活、自然科学の目覚めの時代でした。

「風姿花伝」の「TPOに応じて公案を盡すべし」、「秘すれば花」、「老木に花が咲くが如し」、
｛初心忘るるべからず」は日本の各界でリードしてきた先人に共通に持っていた精神だと思います。
日本文化の源流はほとんどが大陸や半島、北方・南方の島々です。外来文化に継続的に、
創意工夫を重ね、深化させ、換骨奪胎をくりかえして日本独自の文化に成長させてきたと思います。
「風姿花伝」もその一例と思います。そんな伝統を作り、受け継いできた古人たちの系譜の一部を
個人的主観で思いつくまま揚げて見ました。

曽我稲目（506～570）・藤原鎌足（614～669）・中大兄皇子（626～672）・・・・・
平清盛（1118～1181）・源頼朝（1147～1199）・足利尊氏（1305～1358）・織田信長（1534～1582）・・・・
一休宗純（1394～1481）・村田珠光（1422～1502）・利休（1522～1591）・古田織部（1544～1615）・・・・
本阿弥光悦（1558～1637）・小堀遠州（1579～1647）・柳宗悦・浜田庄司・河井寛次郎・北大路魯山人・・
尾形光琳（1658～1716）・酒井抱一（1761～1829）・葛飾北斎（1760～1849）・藤田嗣二・篠田桃紅・・
西田幾多郎（1870～1945）・鈴木大拙（1870～1966）・九鬼周三（1888～1941）・和辻哲郎・中根千枝
杉田玄白（1733～1817）・華岡青洲（1760～1876）・野口英雄（1876～1928）・北里柴三郎・・
大伴家持（718～785）・藤原定家（1162～1241）・井原西鶴（1642～1693）・・司馬遼太郎・・・・・・
田中正造（1841～1913）・南方熊楠（1867～1941）・牧野富太郎（1862～1957）・・・
新渡戸稲造（1862～1933）・杉原千畝（1900～1986）・緒方貞子（1927～2019）・神谷美代子・・・・・・・
関和孝（1642～1708）・伊能忠敬（1745～1818）・・辰野金吾・丹下健三・・・・
渋沢栄一・田中久重・鳥井信治郎・豊田喜一郎・土光敏夫・松下幸之助・本田宗一郎・盛田昭夫・・・・・・　（T.K.）